北海道ＣＵＤＯ

「間違いじゃなかった」、信念胸に設立時から組織けん引

北の地でＣＵＤの〝敬い、思いやる〟を醸成

色覚タイプの違いを問わず、より多くの人に利用しやすい製品やサービス、情報を提供する「カラーユニバーサルデザイン（CUD）」。NPO法人北海道カラーユニバーサルデザイン機構（北海道CUDO）は、2006年の設立以降、北海道で地域や市民に根ざしたCUDの啓発と普及に従事している。近年は札幌市の広報に関する色のガイドラインにCUDが策定されるなど生活に浸透を見せている。今回、設立時から理事長を務める㈲谷越印刷社長の谷越律夫氏に話を聞いた。

谷越律夫理事長

①北海道ＣＵＤＯの概要

東京を本拠とするNPO法人カラーユニバーサルデザイン機構（CUDO）が2004年10月に生まれてから2年後の06年3月、北海道CUDOを設立した。東京CUDOと違って専従の職員はおらず、役員はそれぞれ本業を持ちながら運営に従事している。

主たる事業内容はイベントやセミナー、講演を通じたCUDの普及啓発をはじめCUDに関する相談と助言、検証事業や調査研究のほか認証マーク「CUDマーク」の発行など。法人会員には道内の印刷会社も多数所属しており、かくいう私も理事長職の傍ら会社に戻ればオフセット印刷会社の2代目だ。

②設立の経緯として

東京CUDOの現副理事長で北海道CUDOのメンバーでもある東京大学の伊藤啓先生と東京慈恵会医科大学の岡部正隆先生は、01年から「色覚バリアフリー」の啓発活動を行っていた。

CUDが札幌市広報に関する指針に

CUDO誕生前から両氏のホームページ経由で個人的に質問や相談のメールを送っていて、その中で札幌に住む色弱のデザイナーも紹介してもらっていた。

そのうち、英国の大学で学んでいた岡部先生が帰国してNPO法人を立ち上げるという話に。デザインの意図が伝わらない事実、色弱者への配慮がなされていない現実を知る私は、色のバリアフリー化は社会にもっと知らせるべき重要な問題であると強く感じていた。しかしいつまでも東京の先生にこれは・あれはと都度質問していては、広がるものも広がらない。

北海道CUDOの副理事長を務める先述のデザイナーに「こっちで一緒に団体を立ち上げよう」と持ち掛けた。その栗田正樹氏は当初「考えが甘い、色弱を利用して印刷で儲けようと見られてしまい「うまくいかない」と指摘されたが、どうにか口説き落とした。

こうして東京CUDOにあいさつへ行き、御礼を伝えると共にわれわれも北海道で独自に活動していく旨を伝えた。当初は北海道カラーバリアフリーという別団体を作ろうとしていたが、伊藤先生が同じ考え方で同じことやっていくのだから同じ名前でいいのでは、と提案。同じ〝着地点〟でも、東京と北海道では情勢や環境も違えばそこへ至る手段もやはり異なるので、法人格は別とした北海道CUDOが生まれた。

③色弱との出会いは

ずっと前、印刷オペレーターを募集したときの話だ。1人すごい奴がいて、面接の途中から絶対採用と決めていた。最後に彼が「実はぼく色弱なんですよ」と告げた。恥ずかしながら、そういえば昔学校で検査したかな程度の認識だった。それはどういう具合なのかちょっと尋ねると、色の見え方がちょっと違うんですよと。

われわれの印刷の仕事は微妙な色の違いを再現して商売している。本気でやる覚悟があるなら…と問いかけると「そうですよね、ぼくやっぱり辞退します」と言い残して去って行った。

それからずっと、色弱という言葉が私の頭の中から離れなかった。当時はインターネットが今ほど普及していなかったので、札幌市内で最も大きな書店で文献を探した。色弱専門の本がなく、眼科の医学書でようやく数ページ程度。しかも学術書なので難解な言葉ばかりと結局よくわからなかった。こうして、前述の岡部伊藤両先生のホームページに結び付いていく。

日本人男性の20人に1人は色弱なんですよ。と聞き回るも、皆知らなくて私と同様に驚いていた。

皆知らなかった。札幌市内にも4万5、6000人、北海道で14万人、全国で320万人いるのに、皆が知らないということを知った。「じゃあ広げなければ――」。私のCUD活動の「原点」はそこからだ。

ちなみに面接の彼とは北海道CUDOを設立する前にもう一度会い、君との出会いからずっと色弱の存在を知り、今度NPOを設立することになった旨を御礼の言葉を添え直接伝えた。

④印象に残る活動として

北海道CUDOとして、初めて市内のギャラリーでパネル展を行った時のこと。普通に撮った写真の隣に色弱者の見え方にシミュレーションした写真を並べたもので、道内でも初の試みだった。そこへ、幼稚園くらいの子に手を引っ張られて若いお母さんが入ってきた。野菜の絵の前で立ち止まった男の子が、母親にこう言った。「ママ、これどこが違うの」。

男の子には、トマトの赤がきゅうりの緑と同じ茶褐色に見えていた。どこが違うの、同じだよねと尋ねられて、お母さんは言葉にならなくて涙を流していた。

私は、ここにきたことを後悔しているかと尋ねたら「とんでもない」と。息子の色の感じ方が人と違うことを知ってはいたが、息子の見ている世界を想像することしかできなかった。それが現実に見ることができて、息子のことを少し理解してあげられて本当によかったと帰っていった。やっぱりそうだよな、この活動は間違いじゃなかったと確信した。

こうしてパネル展は、形を変えながらも継続して実施している。中には友人と、祖父母と2回3回足を運んでくれる方もいる。

⑤「ここまでとこれから」

われわれの活動をメディアが報じ、だんだんと企業や市民の目に触れる機会が増えている。そこから行政にたどりついて、16年、札幌市はCUDに準拠する「広報に関する色のガイドライン」を策定した。

そこから潮目が変わり、札幌市交通局にも変化の兆しが。地下鉄東西線のオレンジと南北線の緑が色弱者にとって見分けがつきにくいから、一般の人が戸惑わない形で色に配慮する必要があった。UDへの社会的理解や法整備が進んだこともあり、先のガイドラインに路線図の新しい色も盛り込んだ。これから製作される路線図などの印刷物を中心に、CUD配慮がなされていく動きだ。

札幌市交通局の路線図でオレンジと緑の色の区別にCUD配慮がなされ、モニター左下にCUD認証マークが（上）。下は設立当時から現在も続けているパネル展の様子

CUDの本質は、いかに相手のことを敬い思いやるかにある。こういう風に見えているのか、じゃあ配慮しなければ・支えなければと思えるか否か。人は誰も得手不得手がある。私は背が低い。高い所の物が取れなければ・背の高い人にあれ取ってもらえないかとお願いすればよい。

色覚も同じ。相手を思い、周りが支える。それができる社会が実現すれば、いじめやさまざまな社会問題も解消するだろう。その時CUDOも役目を終える。目下の命題はわれわれの根っこの部分、CUDの精神をどう次の組織に残していくか。いつかCUDが不要になる日のために。